

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

The Reception of Protestant-Christianity in Japan : in case of TSUNASHIMA Ryosen (1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1997-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 關岡, 一成, Sekioka, Kazushige メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1741

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



綱島梁川のキリスト教受容（その二）

關 岡 一 成

はじめに

綱島梁川（一八七三—一九〇七）は、明治末期に高山樗牛（一八七一—一九〇二）とともに当時の青年知識人に大きな影響を与えた人物として有名である。

これまでも、かれの生涯と思想については研究されてきたが、最近『梁川全集』の復刻版が出るなどして、改めて注目されている。その背景には、人々の宗教思想への関心、特に神秘的なものへの関心が高まっていることも関連しているのかもしれない。梁川の場合、文芸・美術評論、倫理思想の分野でも活躍したが、やはり晩年の「予が見神の実験」に代表される、宗教思想がかれの思想では最も注目されたものだったからである。

かれの宗教思想は、少年時代からのキリスト教、そして禅宗とりわけ白隠禅師、さらに晩年の浄土真宗・親鸞への傾倒などから、その内容は複雑で理解することは容易ではない。かれの宗教思想の中心をなすキリスト教は、正統的立場

からは異端・邪道とされるもので、今日も正しく日本キリスト教史においては評価されていないといえよう。

この論文においては、キリスト教受容の視点から梁川の宗教思想を考察するものである。かれの生涯はわずか三四年数カ月と短いものであった。かれが自覚的にキリスト教に接したのは一四歳からなので、キリスト教との関係はほぼ二十年間にわたるものであったといえる。

梁川のキリスト教信仰の変遷については、かれ自身が福音書に描かれているキリストに対する理解の変遷として「無差別的盲信時代」「二元的懷疑時代」「調和的正信時代」の三段階を経て現在に至っているという記述をしているので、これがよく使われる。しかし、この分類は晩年になって信仰の確立を自覚した視点からのもので、必ずしも適切なものと思えないので、筆者は梁川の二十年間のキリスト教とのかかわりを、一、正統的信仰時代、二、ユニテリアンの信仰時代、三、「神子」の自覚時代、四、「見神」の実験時代の四期にわけて以下に考察することにした。

一 正統的信仰時代

(一) 有漢時代

岡山県の高梁からさらに十五キロほど離れた有漢という小さな村、これが梁川こと網島榮一郎が生まれ育った所である。かれがキリスト教を受容したのは、知新小学校を卒業して母校の助教をしていた一四歳の時である。

少年榮一郎は、この片田舎でどのようにしてキリスト教に接触、受容するようになったのであろうか。

かれにキリスト教を紹介したのは、同じ有漢村に住んでいた医師神崎秀甫（一八五六一一九二三）である。神崎の家

は梁川の家の近くで、また漢学の塾もかねていたので、小さいころから出入りしていたようである。

では、梁川より一七歳年長の神崎は、どのようにしてキリスト教を受容したのであろうか。かれの入信は医学を学んだ先生が熱心なキリスト者であったことからその影響を受けたもので、一八八四（明治一七）年に森本（松村）介石から高梁教会で洗礼を受けた。有漢地方最初のキリスト者であった。そののち母・妻を入信に導き、三人を中心にして高梁教会から牧師を定期的に自宅に招いて伝道集會を開いた。そしてかれを中心に高梁教会の伝道所ともいべき有漢講義所が一八八四年九月に開設された。

梁川の日記に度々その名前が登場する庄三郎吉、笹田金次は、村の有力者で信仰の先輩であり有漢講義所の中心メンバーであった。梁川は神崎をはじめとして、これら先輩の影響と古木虎三郎（一八五四—一九一三）牧師の指導などにより入信するに至ったのである。かれ自身の記したものは受洗理由としてはふれられていないが、前年の一月一日に父長四郎を亡くしていることもその入信理由の一つとして考えることができよう。

梁川に洗礼を授けた古木牧師は、一八八四（明治一七）年一月から一八九二（明治二五）年七月までの、七年半余にわたって高梁教会の牧師を務めた人物で、『高梁教会八十年史』では「その輝かしい業績は、わが教会の伝道史上もつとも華かであった一時期を画したものとするも過言ではないといえる」と称賛されている。

一八八四年から九二年という時期は、キリスト教史においては欧化主義時代でキリスト教が盛んになり、またその反動で教育と宗教の衝突問題が起りキリスト教の発展が阻害され始めた時期にあたる。

梁川の入信の一八八七（明治二〇）年はちょうどこの中間点のところにあたる。古木にとつても赴任して三年で最も油がのっていた時期である。組合教会の牧師・宣教師たちの履歴を記した『天上の友』を見ると「先生の説教は随分理

屈に合はざることありしも、その肺腑より出づる簡單なる感話により常に深き印象と生命を得たり」とか、「君の説話は屢論理や教理を超脱することあり」とあるので、学者的なタイプの牧師ではなかつたようである。しかし、キリスト教の初歩にある梁川にとつては教理の上でも良き先生であり、かれは高梁に出向く際はあらかじめ質問事項を書簡にしたためて送り、質問に答えてもらつてゐる。

かれの母教会ともいふべき高梁教会は有漢から一五キロほど離れており、徒歩で三時間半ほどの距離であつた。洗礼・聖餐式などの礼典が行われたり、特別の伝道集會があると、高梁教会に出たが、ほとんどは有漢講義所での礼拝・聖書研究会・祈祷會に出席した。この集會は多い時で十数名、少ない時は数名という集會が多く、キリスト教に対する反動期の一八九二、三年には集まる人も少なく、日記には何度か集會が流會になつた様子が記されている。しかし、小人数であるがゆえに、信者間の結束は固く、梁川の日記に出てくる親密な交友はほとんど信者間のものである。

では、梁川の受容したキリスト教の内容はどのようなものであつたのであろうか。後年、かれは一四歳の中学にも行かない小童が信じたことであるから、深い内容が理解できてのことではない。キリスト教が「文明国の宗教たること、其が何とはなく道德的調子の高き一ふしを有したりしこと、乃至は之れを説き伝ふるもの思想と品性と態度とが廻かに従来の憎侶神官等に立ち優れて立派なるものありしこと」が、その受容の理由であつたと述べている。教理・信条・儀式もそのままに信じた。古木牧師が教えたキリスト教は、オーソドックスなもので、奇跡・原罪・贖罪・三位一体・聖書無謬説なども、説かれるままに信じた。

信仰生活においても、日曜日の礼拝出席、禁酒・禁煙、道德的純潔などが大きな比重を占めていたことがその日記からうかがえる。

喫煙の方は、この時期はもとより、後年こういうことにこだわらなくなつてからも、嗜まなかつたようである。禁酒については「予は元來禁酒と云はんよりむしろ飲めぬ方なれば、何処にても杯を受くるのみにして」と記しているが、酒を飲んだ後に言い訳がましいことを言つて「我ながら詫る心の耻かしき」と書いたり、東京に出て信者が従來禁酒・禁煙であつたものが、理由もなくそれを破つてゐることを批判してゐるところもあり、この時期のかれの信仰生活の一端が禁酒・禁煙にあつたことがわかる。

さらに日記に何度か出てくるのは、教会の礼拝や祈祷会に出席しなかつた際の罪悪感である。少し胃の調子が悪くて講義所に行けなかつた時も「我ながら愚なり、弱なり、横着なり、懶惰なり、噫」と自分を責めている。

梁川は、この時代を「無差別的盲信時代」で「理性は、尚ほ幼稚なる信仰の揺籃の中に安らかに眠り居たりし也」としているが、古木牧師の教える正統的・伝統的キリスト教を素朴にそのまま信じていた時代といえる。とはいへ、『国民の友』『六合雜誌』などを読み、早稲田で直接師事することになる大西祝（一八六四—一九〇〇）の論文にも注目し、キリスト教思想の勉強も怠つていない。

キリスト教思想・神学の知識はともかく、かれが終生関心があつた道徳・倫理上、あるいは品性や態度の面で、古木牧師を始め神崎・庄・笹田といった先輩信者がかれを裏切るような言動をしていないことが、この時代を安らかに過ごせた理由でもある。キリスト教信仰に立脚して活動した山室軍平（一八七二—一九四〇）、留岡幸助（一八六四—一九三四）、石井十次（一八六五—一九一四）などからも大きな影響を受けてゐる。

梁川が山室に出会つた時、山室は末だ同志社の苦学生であつたが伝道で高梁を訪れた時に、あるいは夏期伝道で有漢に来た時に二人は出会つており、顔見知りであつた。留岡の場合は、一八九一（明治二四）年、北海道空知集治監の教

誨師として赴任するにあたり、告別のため高梁を訪れ、有漢にも来訪し、梁川はこの時に留岡の話聞いて感激しているし、日記には「信仰の明星と仰がる人物」¹⁴と記している。

梁川は、この三人の中では石井の活動から最も感銘を受けている。高梁教会の創立十周年記念に出席するため高梁に行き「破帽弊袴、身に一枚筒袖を着、足に一雙の古草履」¹⁵を履いた石井が、孤児数十名を引率して「亮々たる喇叭の声と共に整齐歩武をそろへて高梁市街を進行し、説教を書したる一葉の紙片を一家ごとに悉く賦与し、且つ夜に入りて至る所團を結びて路傍演説をなせしは実に目覚ましくも殊勝なることにありき」¹⁶とその日の印象を記している。

また別の箇所では、「石井の孤児救済の活動にふれて、孤児の養育教導する人物はアメリカのミュラーと石井の二人のみで「或人曰く石井氏の事業は新島襄氏に超越せりと。余も亦その溢美の言にあらざるを信ず」¹⁷と述べ、さらに「明治のペスタロッチ」¹⁸とも絶賛している。

(二) 東京専門学校時代

梁川は有漢で生まれ育ち、一八年と数カ月をそこで過ごした。先述のようになれば、卒業後ただちに母校の助教となり、教壇に立っていたのであるが、日記を読んで不可解なのは、ほとんど学校でのこと、生徒のこと、教育のことについて記していないことである。

日記を書き始めたのは一八九一（明治二四）年三月七日からなので、この時期には教師としての経験も五年になり、卒業後一三歳で教壇に立った時の緊張や困難も克服して、学校における仕事はつつがなくすませるようになっていたという事情もあるのかも知れない。かれは父親を失い、家計を助けなければならぬ身であったが、小学校の教師として

終わることを望まず、さらなる勉学の機会を求めた。援助する人もあり、教師をやめて進学する希望がかなえられることになった。かれの関心はキリスト教であり、古木牧師をはじめ、高梁教会に応援に来る神学生はすべて同志社の学生であったこともあり、当初は同志社への入学を希望し、ほとんど京都に行くことに決定していた。

京都への出発もあと半月ほどとなった時に、東京の知人から東京専門学校への入学を勧められ「余は一たび同志社へと決心し居りしかど、将来のため専門校の方大に都合からむと思へば、終に志をかへて専門校に行く事に決しぬ¹⁹」というので、急遽東京へと行く先が変更された。

その後、夏休みで帰省中に村の有力者と会った際に、岡山師範学校か中学の教師の可能性を尋ねていることや、東京に出て数年間は、学業を終えたら故郷に帰り故郷の為に力を尽くしたいと考えていたと述べているのを見れば、卒業後は岡山に帰り、教師として活躍するつもりでの進学であったようである。

梁川が東京に到着したのは、一八九二（明治二五）年一月一七日で「午後七時前後余が多年夢寐恍惚の中に往来したりし最も希望に満ちたる花の都なる東京に着しぬ²⁰」とその感激を記している。

一月一九日には、東京専門学校（早稲田）に仮入学。三月には、編入の手続きをして正式に東京専門学校専修英語科三年になることができた。

このように勉学の方は順調にスタートしたが、信仰生活の方はどうであったろうか。かれは有漢時代と同様の信仰生活を始めた。東京に到着した一七日は日曜日であったが、夕方ということもあり、知人の下宿に落ち着いて休息している。かれにとっては、東京での最初の本格的な日曜日は一月二四日であったが、この日は前年七月に先に上京していた医師の神崎の導きで、高梁教会と同じ組合教会の本郷教会に出席した。

この時代の本郷教会の牧師は横井時雄（一八五七—一九二七）であった。梁川はこの時本郷教会に来て、先ずその建物を見て「建築の奇麗にして規模の宏壮なるは余の双眼を射来り、余が罪惡の淵に沈みたる腐腸も忽ち清らかなる天水に洗はれたる如く、自ら一種高尚なる神聖なる感情を吹き込まれたる如き心地せり」と会堂に圧倒されている。

それもその筈、この会堂は横井がアメリカで十カ月をかけて一万ドルの募金をして建設したもので「当時としては豪壮な煉瓦造二階、ギャラーリ付の大会堂」で前年の一八九一年四月に完成した真新しい建物であったのである。かれは、その後たびたびこの教会の礼拝などに出席し、横井の説教や聖書講義を聞き、時にはキリスト教関係の書物の便宜も与えてもらっている。

二月一四日の日曜日の日記には「午後二時より聖書講義を行き聴くこと克はざりき。されども一日間一度も靈の糧を得ず、空しく鬱々たる雨窓に蟄居する太だ遺憾なれば、この夜は少し早く晚餐を喫し、扼腕蹇裳意を決して怒風狂雨を冒し神崎氏を誘ひ、会堂に詣で横井氏の説教を聴て帰れり」と記すほど、熱心に教会に通っている。

時には同じ組合教会の番町教会に顔をだし原田助（一八六三—一九四〇）の説教を聞いたり、メソジスト教会での特別集會に出席して松村介石（一八五九—一九三九）、平岩愼保（一八五七—一九三三）の演説を聞いたりもしている。内村鑑三（一八六一—一九三〇）や津田仙（一八三七—一九〇九）の演説も東京に来て早い時期に聞いている。

五月二九日の日曜の日記には「試験の用意のためこの日は教会に行かざりしは我ながら卑怯不恭の痴者なるかも」と痛烈に自己批判をしている。

またこの年の七月二日の日記には、岡山出身の六人のキリスト者が集まり記念写真を撮影したことを記している（日記はこの日で終わり、次に日記が再開されるのは翌年三月になってからである）。

上京して半年間は特別な集会がある時は別として、原則として本郷教会の礼拝に出席していたのが、七カ月後の三月の日記では、出席教会が日本基督教会の市ヶ谷講義所に変わっている。筆者の見るかぎりでは、どこにもこの移動の理由が記されていないので、一体この間に何が生じたのか、不明である。

ただ推測できることは、当初は新神学に批判的であった横井が金森通倫（一八五七—一九四五）が一八九一（明治二四）年に『日本現今之基督教並ニ将来之基督教』を著して新神学の信仰を表明してキリスト教界から去ったのを、後を追うように新神学に傾斜しつつあった時期なので、このことが関連しているとも考えられる。さらに、新神学の影響は組合教会・同志社出身の牧師に顕著に見られたが、この人達が正統的信仰の時代には堅持していた禁酒・禁煙や聖日礼拝の厳守を破りだしたのを心よく思わなかったことが考えられる。

これは一八九四（明治二七）年に東京から有漢の親しい信仰仲間へ送った手紙の一節であるが「小生のあきれはてたるは東京の基督教信徒の墮落に御座候。彼等は随分口には立派な基督の聖語をはさみ候へども多くはこの頃の腐れ卵同様鼻をつまみて逃げるほかは無之候。酒ものむべし煙草もすふべしといふ開化連中も真に心より開化して然るにあらず。唯だ其の流行風におそはれて主義もなく訳もなく然るものなり。かりそめにも心の中に一個の理由を見つけて後酒のむべし煙草吸ふべしと大呼するはまだしもよけれど何故に酒のむべく煙草吸ふべきか。何故に日曜に業をなすもよきやなどいふ理由を知らずして人の声に付和雷同してさけぶは小生の合点のゆかざる所かかる雷同者流ある為如何ばかり他の堅固なる信徒をつまづかせしか誠に教知れずほどに御座候。（中略）誠に尤もなげかはしきは同志社卒業生の東京にあるもの十中の八九は唾はきかけてもよきほどにくされたるが多く御座候。過日も小生は筆に書くもいまはしきほどの実例を目撃しひたすら嘆息致し候。新島先生地下にありて如何になげき玉ふやらんと思へばかかる腐敗動物を一匹ものこ

らず退治し尽し度き心地致し候」と激しく非難しているからである。

では、梁川が出席していた頃の市ヶ谷講義所はどのような教会であったのだろうか。『植村正久と其の時代』によれば、一八九一（明治二四）年六月から多田素（一八六七—一九四一）が専任となり礼拝の説教、信徒の訪問をし、植村は礼典を司さじるといふ二人体制であったのが、一八九二年二月に多田が講義所を去り、植村が説教・訪問も担当するようになり、この当時の礼拝出席者は四〇名、祈祷会は一〇名といふことである。⁽²⁸⁾

植村正久（一八五八—一九二五）は、キリスト教界が外に教育と宗教の衝突の問題、内に新神学の問題を抱えていた時代に、正統的信仰・福音主義信仰をもち続けた人物として名高いが、そのような植村を慕って市ヶ谷講義所に移動したのかどうかは不明である。

本郷教会に出席していた頃にはなかったことであるが、市ヶ谷講義所では、青年会の幹事に推薦された時には、学業が忙しいので役員の任に当たるのは気が進まないが「神のために尽くすなりとおもへば喜んで為すなりと信じぬ」と引き受けている。五月一三日には植村とともに講壇に立ち、植村の有神論についての話の後、「感情は哲学よりも其根底や深しと云ふ主意」で演説もしている。

ほぼ毎週日曜日には礼拝に出席し、この時期にも以前と同様、特別な理由もなく礼拝を休むと「怠惰心からられてかくは心ならずも罪を犯したりき」と悔いている。⁽²⁹⁾

結果的には費用の工面ができないこともあり参加しなかったが、この年の夏に帰省の際には、途中須磨に立ち寄り同地で開催されるキリスト教青年会夏期学校への参加も計画していた。⁽³⁰⁾

このように熱心に市ヶ谷講義所に通い、植村の説教を聞き感動し、親睦会にも参加し、青年会の幹事として活躍して

いたが、一八九三（明治二六）年七月には、正統的信仰への疑いが生じている。直前の六月一日の日記には植村の代表作『真理一斑』（一八八四年刊）を読んだことが記されているが、この書もかれを正統的信仰に引き留めることができなかったようである。³⁴これは上京して一年半後のことである。

夏休みで有漢に帰省中の七月三日の日記には「むかしのごとく正統的にあらねば」と初めて信仰の変化が記述されている。この日の日記には、その変化の理由や動機などは記されていない。ただ、末だ東京にいた時の七月一日の日記の記述は、正統的キリスト教を離れる動機がどのようなところからのものであるかを示唆しているように思う。

この日、梁川は友人の細井と二人で、帝大教授で倫理学を教えていた中島力造（一八五八—一九一八）を訪問した。しかし、中島は留守で会うことができなかった。この時に二人が中島への質問として用意していたのは、細井が「宗教と教育の衝突」問題なのに対して、梁川が用意していたのは、中島の「基督教に於ける信仰如何」という問題と、「宗教と学術とは一致すべきや否や、もし一致すべからざるものとせば学術と宗教と孰れか真理にかなへるか、抑も両ながら人性の至情より出たるものなるか」という宗教と科学・信仰と理性の問題、そして三番目の質問として「倫理上所謂良心なるものの起源」³⁵、即ち宗教と倫理の問題である。細井が内村の不敬事件から、当時大きな社会問題ともなっていた「教育と宗教の衝突」問題をとりあげているのに対して、梁川がかれ自身当てもっとも悩んでいた「宗教と科学」「宗教と倫理」の問題をとりあげていることは、好対照をなしている。

中島への質問が示しているように、宗教と科学、信仰と理性の問題がかれをして正統的信仰にとどまらせなかった問題であった。これはかれが正統的信仰を脱してユニテリアンの信仰を持つに至ったことを見ても明らかである。

正統的信仰時代は、先述のように七月二三日には「むかしのごとく正統的にあらねば」と記しているので、この時期

で終わりとするのが妥当であろうが、この記述の後に安息日の礼拝に出席しないのは「安き心ちせねば、強て心を鞭て出会しぬ³⁶⁾」として礼拝にも出席し、その後も日曜日には礼拝に出席しているので、八月末までは正統的信仰の時代とした。

八月一日を最後に日記が途絶えるので明白ではないが、夏休みを終え東京に帰り、坪内逍遙（一八五九—一九三五）宅に書生のようなかたちで同居し、『早稲田文学』の編集などを手伝うようになってからは、教会の礼拝や集会には一切出席しなくなったようである。

正統的信仰時代は、一四歳から二〇歳の六年ほどの時期であった。

二 ユニテリアンの信仰時代

梁川は正統的信仰時代の後に来た次の時代を、二元的懷疑時代とか、道徳・倫理時代と名づけていたりしているが、これはかなり後年にキリスト教信仰の変遷を振り返って命名したものである。正統的キリスト教でなくなったと自覚した時期の認識では「小生は最早オーソドックスの基督教徒にあらずむしろユニテリアン教徒の方に近きものなり³⁷⁾」としている。筆者は、こちらを採用してこの時代をユニテリアンの信仰時代とした。

教会に行かなくなった梁川は、その信仰がユニテリアンに近いとしながらも、実際にユニテリアン協会に通うというようなことはしていない。ユニテリアン協会の信者になったのではなく、あくまでその信仰内容が近いということ。「ユニテリアンの」なのである。かれの正統的信仰からユニテリアンの信仰への変化にあたっては、東京専門学校で教

えをうけた大西祝の影響が大きかったことも考えられる。大西は同志社で神学を学び卒業し帝国大学に進学したのであるが、東京に移って暫くは日曜毎に教会に通い礼拝に参加していたが、梁川が教えを受けた頃には正統的信仰を脱し教会には出席していなかった。

では、梁川のユニテリアンの信仰の内容はどのようなものであったのであろうか。「宗教と科学」「宗教と倫理」の二点から、以下に考察したい。

(一) 宗教と科学

日本に初めてプロテスタント・キリスト教を伝えた宣教師たちは、聖書に記されているできごとを文字通り事実として信じる人たちであった。同志社で一期生を教えた旧約聖書のドーン (E. T. Doane, 一八三〇—一九〇) 宣教師などは、創世記の天地創造のできごとを紀元前四千年のことと教えたりしている。原罪、奇跡、イエスの復活なども文字通りのできごととして教えた。さらにキリスト教史で伝統的に信じられてきた三位一体、贖罪の教義などもそのまま信すべきこととして教えた。さらに、キリストを信じない異教徒は地獄に行き永遠に神罰を受けることなどが強調された。

このようなことを教えられた当時の青年も、ただちにこのようなことをそのままに信じることはできず反発を感じたものの、それを理論的に展開して反論することはできなかった。「西洋人の様な文明人が固く信じて疑はないと云ふのであるから、我等青二才の青年が理屈を言ったところで始まらないと、恚思うて、何時も其等の穿鑿を止めて仕舞ったことであつた。然り『彼の偉い西洋人(ワシントン・リンカーン・クロムウェルなど)筆者』が之れを信じて居るのであるから」と云ふ此の論理は、実に当時の信者を畏服せしめた唯一の權威であつた」³⁹⁾のである。

ところが、ここにダーウインの進化論が紹介され、創世記の天地創造とは矛盾する真理が説かれ、キリスト教受容者の間に「宗教かそれとも科学か」という問題が生じた。キリスト教国のヨーロッパ・アメリカにおいてもこの問題は大きかったが、キリスト教受容の歴史の浅い日本においては致命的で深刻な問題になった。さらに、反キリスト教思想ともいうべき不可知論・唯物論・社会主義思想などが、次々と紹介されることにより、どちらが正しいのか自ら判断せざるを得なくなった。

また、普及福音教会（一八八五年）・ユニテリアン（一八八七年）・ユニバーサリスト（一八九〇年）など、自由主義キリスト教の宣教師が相次いで来日し、合理的なキリスト教解釈を説いたので、「宗教と科学」「信仰と理性」の問題は知識人キリスト者の全てが解決しなければならない問題となった。

一八九一（明治二四）年四月二七日の祈禱会の席で、神崎が「聖語を引き、決して今日の粉々たる新説奇論に動かさる勿れとの主意にて一片の感話⁴⁰」を述べているところを見ると、すでに早い時期に新神学や反キリスト教思想などが有漢にも伝わっていたようである。

素朴な正統的信仰を持っていた有漢時代の梁川はそれに動揺することがなかったが、東京に出てこれらの思想に右往左往する信者たちを目の当たりにし、その信仰態度に失望すると同時に、将来哲学・歴史を専攻したいと考える⁴¹ほどに哲学・歴史書を読み、信仰と理性の問題がかれの中心の問題になり、その解決を迫られることになっていたのである。梁川の著作のリストは『梁川全集』第十巻、六七五頁から七〇一頁に掲載されている。『梁川全集』編集者の安倍能成はこのリストは梁川の執筆したもののすべてを網羅したものではないと断っているが、梁川の処女論文が抜けている。したがって『全集』にも収録されていない。

梁川が正統的信仰からユニテリアンの信仰に移行して間もない一八九三（明治二六）年二月二十八日に、友人の水口鹿太郎を介して一論文を「ゆにてりあん協会」が発行していた雑誌『宗教』に投稿した。そして「予が論文を公にするは今回がはじめてなれば中心何となくうれしくてたまらず。来一月の該雑誌に載せられて世に出づるを指をり数へて待つことの如何に楽しきことよ。予はこの位のことを鬼の首を得たらんごとくうれしがるは、実にあまり子供らしければ、自ら心に愧じて幾たびかその情を抑へんとせしかどその功なかりき」と述べて、活字化されるのを楽しみにしている。

「我が邦現時の基督教青年に於ける怪疑の傾向」と題するこの論文が梁川の処女論文であり、二段組で八頁のかなり本格的なものである。かれは「予自身、及びその他三四人の子が知れる基督教教育青年の現況より」これを書いた、ということなので、後年の回顧と違い、信仰と理性の問題に煩悶する最中に書かれたもので、この時代のかれの思想を知る上で欠かすことのできない資料である。

実際には、二カ月遅れて三月五日に刊行された『宗教』第二九号に掲載された論文の中で、かれは理性に照らした伝統的・正統的キリスト教解釈に対する疑問を次のように提起している。

耶蘇基督とは果して何物ぞ、今まで余輩が正統的に信じたる如き超自然なる神の子なるや、將た万有皆神性ありとするの点より見てしかいふにや、聖書は皆インスピレーションより成れるものなるや、現時の批評的研究法の進歩は、之に向て如何なる断案をか下しつる、創世記の天地開闢説は、今日地質学者の説と齟齬する所なきか。四福音伝は皆その門徒の、直接に目撃耳聞せるものを、確実に記したる伝記なるや。彼の奇跡異能なるものは、疑ふべからざる歴史的事実なるか。予輩の靈魂は、肉体と共に滅するものにあらざるか、もし滅せずとするも果して意識

を有する否や。未来の有無は基督教に何等の關係を有するや、贖罪とは何ぞ、甦生とは何ぞ、將た来世の賞罰とは何をか意味する、基督教徒ならざるものは、皆無間地獄に墮落し、未来永劫神罰を受くべきものなるや。異教徒の中にも、篤実誠義の君子あるにあらずや、彼等は皆異端外道として、排斥すべきものなるや。神は宇宙の外に超然独立せる絶対的のものなるや、將た一木一草の中にも顕現して、燁煜たる靈光を放つといふ凡神的の所謂神なるや、儒教、仏教は大に研究するの価値なきか。基督教とこれらの宗教は、断々乎として相容れざるの性質を有するや否や。抑も基督教とは、或る一派の人のいふ如き狹隘なるものなるか。

梁川は、理性・科学を中心にし、理性を満足させる信仰、真理に基づく安心が必要であり、そこに到達する為にこのような懷疑をしていると述べている。

後年のこの時代の回顧では「信仰の危機は、何人も概ね一度は経過すべき所ならんが、予も亦一時全く懷疑不信の狂瀾に巻き込まるに至りぬ。理性が自家独立の要求を漸く意識し来たりしにつれて、樂しかりし嚳昔の信仰もまたやうやうにして破れ易き空虚の夢を育むに至れるぞ是非なき。かくて暫くは持続せざりし予が惰力的信仰も、ダーウインの進化論、ヒュームの懷疑説、カントの批評哲学、其の他予が当時修得せる多少の哲学的造詣の為に、あはれ最後の一撃を受けたり」としている。

理性に基づく信仰、合理的信仰を求めた、ということでもユニテリアン的な信仰時代であったといえよう。

(二) 宗教と倫理

ユニテリアンは、理性になう合理的信仰を強調すると同時に、道徳・倫理を強調した。梁川はこの点でもユニテリアンであった。かれが正統的信仰を脱し、ユニテリアンの信仰に変わった一八九四(明治二七)年の書簡で「道徳の方よりいへばユニテリアン教徒たりともオーソドックスに必ずしもおとるといふごときは決して無之否かへりてユニテリアンの中に人物多く見うけられ候。横井氏の如き大西氏の如き松村介石氏の如き其他東京にて随分学問道徳をもて人々に推さるる人多くはユニテリアンもしくはユニテリアンの信徒なり。何はともあれ徳をおさめ人物を高くし品性を淨くするが第一なり」⁽⁴⁶⁾

正統的信仰時代、とくに有漢時代には、道徳的に立派と思える人はほとんどキリスト者であり、キリスト者イコール高潔な倫理・道徳と考えていた。しかし、東京に出てかれが見たキリスト者には幻滅させるものがあった。先述したように、恐らく新神学・自由主義キリスト教の表面的な理解から、禁酒・禁煙・安息日の厳守などが放棄されたことへの失望があった。

正統的信仰でなくても、ユニテリアンでも道徳的に立派な人物は多くいる、というかれの実感は、さらにキリスト教を信仰していない人の中にも徳の高い人はいるといふ実感により、倫理が宗教と同等の位置に置かれるようになる。

梁川は、一八九三(明治二六)年九月頃から坪内家に同居することになったが、かれが直接目の当たりにした坪内夫妻の生活はかれに感銘を与えた。「小生の仰ぎ尊ぶ坪内先生はただに文学士として小説家として我が現時の日本の文壇の大將軍たるのみならず徳高く行全き人物として稀に見るところに御座候。小生がはじめて先生の宅へ奇遇する時や唯だ小説家として文学者として名高き春のやおぼろ先生としてのみ先生を知れるのみなりしが久しからずして先生の人物

に感服致しかかる人物は基督教信徒のうちにも少なかるべしと存じ候[㊦]と述べるようになる。

梁川はユニテリアンになるとともに、だんだん宗教イコール倫理、さらに倫理によって宗教に代えられると考えるようになる。

このような中で、一八九五（明治二八）年六月に東京専門学校文科を卒業するが、論文として提出したのは「道徳的理想論」であった。

この論文は『梁川全集』第四巻の七一頁から一五四頁、及びその要旨が五〇一頁から五〇三頁に収録されている。巻頭に「『六合雜誌』第七一七号なる大西祝氏の「道徳的理想の根柢」の一篇は余に少からぬ suggestion を与へたり、ここにこれを謝す」と謝辞が述べられていることからこの論文が大西の影響を受けて書かれたものであることがわかる。

論文の主旨は、人生には、究竟目的（絶対的思想）が存在し、人はその目的に向かって向上精進する。そこに道徳的意識とか道徳的理想とかが生じる。理性的活動・美的活動・道徳的活動としての自我を最も完全に、かつ調和的に実現した真我が絶対的理想である。

「吾人の道徳的生活は絶対的理想の徐々実現せらるる段階に外ならず、無限の活動、無限のストラッグル即ち道徳也、我が我を自識しつつあるプロセス即ち道徳也、誰か絶対理想を全く実現せずば、吾人のストラッグルは無益なりといふぞ。理想の一段階を実現するはこれやがて其全段階をフルフィルし実現するにはあらざるか、相対理想の実現を離れて絶対理想の実現なければ也[㊧]」

では、絶対的理想・真我の実現と宗教・神の関係はどのように考えられたのであろうか。かれはこの論文の中で神については「吾人は宇宙に絶対者 (absolute being) あるや否やを知らず、唯宇宙万有となりて、顕現せし絶対者あるを

知るのみ⁽⁴⁹⁾」神は客観的に人間を離れて実在するのではなく、「我の中に我として存すと思ふ。而して吾人自家の中に存する神、即ち我をますます明に發揮し実現する、これ即ち道德也。又件の神（即ち己に最も完全円満に実現せられ、而もインプリンシットリーに吾人自家の中に潜せる我）を崇拜畏敬し、之れに対して烈々たる enthusiasm の情をいだけ、之れ即ち吾人の宗教也⁽⁵⁰⁾」としている。

この汎神的神観や宗教観は、一年後には「神を空理上より割り出し、論理の必然として客観に置きしなり⁽⁵¹⁾」として否定されている。

ユニテリアンの信仰時代は、一八九三（明治二六）年九月頃から一八九七（明治三〇）年三月頃までの三年半であった。

注

(1) 『梁川全集』（以下『全集』）第五卷、三五七頁。これは亡くなる一年数カ月前に書かれたものである。

(2) 神崎とキリスト教については、川合道雄『綱島梁川とその周辺』及び『高梁教会八十年史』参照。しかし神崎の入信時期については、川合氏は「十五、六歳の頃（二二頁）としておられるが、『高梁教会八十年史』では一八八四年となっており（一九頁）二八歳である。川合氏のいう「十五、六歳の頃」は、キリスト教が黙認されるようになる明治六年より前の一八七一、二（明治四、五）年となり、その時期に神崎が医業を修行したという高梁にはキリスト教が布教された形跡はない。神崎が洗礼を受けた高梁教会の創立は、一八八二（明治一五）年四月二六日であり、この二年半前からこの地方に伝道が開始されていたとあるので、高梁近辺にキリスト教が伝えられたのは明治二二年頃となる。川合氏の「十五、六歳」説は、何かの間違ひではなからうか。

(3) 『高梁教会八十年史』一三三頁。

(4) 梁川の洗礼の時期については、『全集』第八卷「綱島榮一郎年譜」では、一八八七（明治二〇）年のところに、月日は記されていないが「高梁教会に於て牧師古木虎三郎氏より洗礼を受く」と書かれている。これに対して、『綱島梁川の生涯と思想』（早稲田大学出版部）で「有漢在郷時代」を

執筆した木村勝三氏は、高梁教会の洗礼者名簿を基に一八九〇（明治二三）年一月五日説を唱えておられる。

しかし、筆者は一八八七年説を採用した。その理由は、梁川が「枕頭の記」において「予は一四五歳の頃、郷里なる組合派の一基督教会に籍を置きてより来、二十歳前後の頃まで、謂ふ所正統的基督教の一信者たりき。（中略）当時未だ中学の科程をも履まざりし一小童如何で基督教の何たるを解し得んや、唯だかゝる取りとめもなき漠然たる外形的異彩に、幼なご、ろの何とはなく心意かれて、この新来の宗教を一筋に慕はしとのみ思ひなりぬ」（『全集』第五卷、三三八頁）とあり、この文章は、受洗を知新校を卒業した翌年とすることのでつじつまが合う。一八九〇年とすると一七歳となり、「小童」とか「幼なご」という表現はそぐわないのではなからうか。

では、洗礼者名簿という根拠はどうなるか。木村氏はこの名簿の記述には「英一郎」、「五月二十七日生」が「二月生」、死去の日が「九月一四日」が「九月一五日」と三点の誤りもあるが「根本的な問題点はないといえよう」（二四頁）と結論づけているのであるが、筆者はこのような基本的な誤りが記されているのに、洗礼日だけには誤りがないとするのは問題で、この名簿が洗礼当時でなくかなり後年に書かれたもので、信頼できる資料でないことを意味していると考ええる。

一つ考えられることは、教会に出入りしただのが一四歳ごろで、洗礼を受けたのが一七歳ということである。行安茂氏がこの立場である（『近代日本と西洋思想の受容—網島梁川—』岡山大学教育学部研究集録、第一〇三号別冊、一頁）。しかし、筆者はこの説も受け入れられない。というのは、梁川が「籍を置く」という言葉を使用しており通例これは洗礼をうけて籍を置くことを意味しており、また、梁川が先述のように正統的信仰時代が一四、五歳から二〇歳（これを述べた文章の後の記述で「六年が程」とも記している）としており、これは明らかに求道中の時代を含んでの表現とは思えないからである。

5) 今泉真幸編『天上の友』日本組合基督教教師会、一九一五年、六一頁。この書では六頁にわたって古木のことが記されている。

6) 梁川が、古木の後任として高梁教会に赴任した寺沢との比較を記した文章によって、古木がどのような人物であったかが伺える。「〔寺沢〕氏とはと群馬県とかの中学校にて教育に従事せられ、哲学上科学上の学識また社交的技術に至りても、前牧師古木氏とははるかに卓出せら（れ）ければ、異信徒を議論上にてやりこめること、地方の小学教員などの天狗連をして舌を捲かしめること、及び群役所などの官吏と巧みに交際すること等に至りては教員も一同満足したれども、一得一失は免れがたき常理にて、氏の欠点は常に哲理的考証的演説議論は上手なれども、感情まことに少くして、人をして惻々感動せしむる底の説教の出来ざるにあり。故に外部の異信徒に向ては寧ろ適任の演説者ならぬと、教会内の信徒をして信仰をもやさしむる説教を得なさざるなり。その説教つねに理屈にのみはしりて、幾多の善男善女をして欠伸せしめ、睡気催さしむること多かり」（『全集』

第八卷、三〇三、四頁）

7) 『全集』第八卷、五六頁。

8) 『全集』第五卷、三三八頁。

- (9) 『全集』第八卷、三二六、七頁。
- (10) 同書、一一二頁。
- (11) 『全集』第五卷、三五九頁。
- (12) 一八九一(明治二四)年五月二日の日記に「国民の友第百十三号に掲載ありし大西氏悲哀の快感でふ草論を精読して大に得る所ありき」として、その所論の要領をその後に行ほど記している。(『全集』第八卷、三五頁)
- (13) 一八九一年六月二六日に高梁教会で山室に出会った時は「一年間の疎情を謝し」(『全集』第八卷、五七頁)とあるので、かなり以前からの顔見知りであったようである。七月二日の日記には、夏期伝道師として高梁教会に招聘されていた神学生の津下紋太郎と山室が有漢を訪れた時のことを「今晚八時より講義所に於て有益なる説教あり、聴衆は至つて鮮かりしも大に感動を受け□るものもありたり、余輩不信仰の者には近來一服刺激剤にてありき」(『全集』第八卷、五九頁)と記している。
- (14) 『全集』第八卷、二九頁。
- (15) 『全集』第六卷、三二頁。
- (16) 『全集』第八卷、一〇五、六頁。
- (17) 『全集』第六卷、三〇頁。
- (18) 同書、三二頁。
- (19) 『全集』第八卷、一三二頁。
- (20) 同書、二九八頁参照。
- (21) 『全集』第六卷、一三三頁参照。
- (22) 『全集』第八卷、一三三頁。
- (23) 同書、一三六頁。
- (24) 『弓町本郷教会百年史』二五頁。
- (25) 『全集』第八頁、一四五頁。
- (26) 同書、二〇〇頁。
- (27) 『全集』第九卷、二二、三頁。
- (28) 『植村正久と其の時代』第三卷、一二四、五、八頁参照。
- (29) 『全集』第八卷、二二六頁。

- (30) 同書、二四一頁。
- (31) 同書、二五四頁。
- (32) 一八九三(明治二六)年四月一六日(日)「植村牧師は信仰と望と愛のことにつき吾儕信徒に有益なる説教ありき」(『全集』第八卷、二二六頁)。
- 四月二三日(日)「市谷講義所にて植村氏の説教をききぬ。大意、人は神の性質を幾分か持ち居れば、今こそ肉体に制せられて自由に靈の發達をなさざれども、吾人肉を没するの日には神と一致するを得ると云ふにありて、甚だ有益なる糧なりき」(同書、二三一頁)。五月二日(日)「市谷講義所に行き、青年会親睦会に臨みぬ。会するもの僅かなりしかど、植村氏は熱心に祈りかつ談話せられ、大に益を得たりき」(同書、二四五頁)など日記に記している。
- (33) 『全集』第八卷、二五四頁。しかし、読後感などは一切書かれていない。
- (34) この時代梁川は、市ヶ谷教会に毎日曜日通い、植村とともに演説したり、「増子氏と青年会演説会のことにつき、増子氏は市ヶ谷教会の親睦会の件につき相談するところありて植村氏を訪問しぬ。幸にして在宿なりしかば取り決めて帰りぬ」(一八九三(明治二六)年五月二二日の夜に訪問、『全集』第八卷、二四六頁)と、直接面談もしているのに「植村正久と其の時代」第五卷、五八五頁には「植村正久と梁川との間には、勿論、直接の交渉はなかつた」と記されている。これは誤りであろう。
- (35) 『全集』第八卷、二八〇頁。
- (36) 同書、二八九頁。
- (37) 『全集』第九卷、二頁。
- (38) 「創世記を教ゆるに、先づ世界の創造は紀元前四千年である事や、神が六日に此世界を造り給ふた事や、アダム、エバの物語など、旧約書を取扱ふに現代の書の如く文句通りに信ぜしめんとした」(小崎弘道『小崎全集』第二卷、三三七頁)
- (39) 松村介石『信仰五十年』二五頁。
- (40) 『全集』第八卷、三三三頁。
- (41) 同書、一三七頁。
- (42) 『全集』第六卷、七五頁。
- (43) 同書、七五頁。
- (44) 網島榮一郎「我が邦現時の基督教青年に於ける怪疑的傾向」『宗教』(日本ゆにてりあん弘道会発行)第二九号、一八九頁。
- (45) 『全集』第五卷、三五九、六〇頁。
- (46) 『全集』第九卷、三頁。

- (47) 同書、二頁。
(48) 『全集』第四卷、五〇三頁。
(49) 同書、一〇〇頁。
(50) 同書、一〇五頁。
(51) 『全集』第六卷、一四七頁。